

## 「アンネのバラと紫花だいこん」 2014年06月16日

広島平和公園のバラの花壇で「アンネのバラ」を初めて見ました。「アンネのバラ」は開花後、美しく変色するそうで、私が見た「アンネのバラ」は赤からオレンジ色に変わっていく途中のようでした。アンネは言うまでもなく、第二次世界大戦中ナチス・ドイツの大虐殺（ホロコースト）によって、殺されたユダヤ人少女です。屋根裏で隠れた生活を強いられた少女の澄んだ目を見た体験を記した日記を、父親のオットー・フランクが『アンネの日記』と題して出版し、世界的なベストセラーになりました。「アンネのバラ」は正式には「アンネ・フランクの形見」と言われていたそうです。1971年に日本に輸送され、徐々に増えて、今ではあちこち「アンネのバラ」が咲くようになっています。アンネの無残な死を悼み、平和を希求する花として愛でられています。

『週刊金曜日』の投書欄に、81歳の女性が「紫花だいこんから」を寄稿していました。感銘を受けたので、紹介したいと思います。「紫花だいこん」は薄紫の4枚の花弁があり、薄黄色のおしべとめしべがあり、上品で楚々としている。40～50センチメートルも伸びる。プランターに植えるより、野山に咲くのが似つかわしい、優しさにあふれた花だそうです。

寄稿者は「紫花だいこん」を見て、かつて読んだ『むらさき花だいこん』という、中国にいた日本人の傷病兵と中国人の少女とを描いた童話を思い出しました。

その童話は—日本の傷病兵が散歩していたら、中国の一人の少女と出逢う。少女は日本兵を見て、恐れて後ずさりする。兵士は「何もしない、なにも」と言う。すると少女は、一本の「紫花だいこん」の花を差し出す。兵士は「ありがとう」と言って受け取ると、少女は、ずっと霧の中に消えていった—という童話です。悲慘に殺し合う戦争を否定し、人間本来の優しさに立ち返ることを訴えた童話です。

この童話の後記に、日中戦争が終わった時、山口誠太郎氏が南京から「紫花だいこん」の種を持ち帰り、日本各地に配った。山口氏の息子も、父の遺志を受け継ぎ「平和の花だいこんの会」を作り、百数十万袋もの種を根気よく生み出し、全国各地に配り続けたとあるそうです。

寄稿者はプランターの「紫花だいこん」を見ながら、このようなルーツをたどって咲いている花をいとおしく思うと書いています。そして最後に、次のように締めくくっています。「憲法9条は、国際平和を希求し、永久に戦争の放棄をのべている。この9条を改悪しようとしている政府、こじつけの勝手な解釈に、わたしたちは、本質を見抜く目を持ち、未来の若者たちに平和の尊さを訴えるつとめがあるのではないかと思う」。

私は「紫花だいこん」は見たことがありません。見てみたいものです。「アンネのバラ」と「紫花だいこん」の花に託した人々の平和への願いは美しく、心和む思いにさせられました。